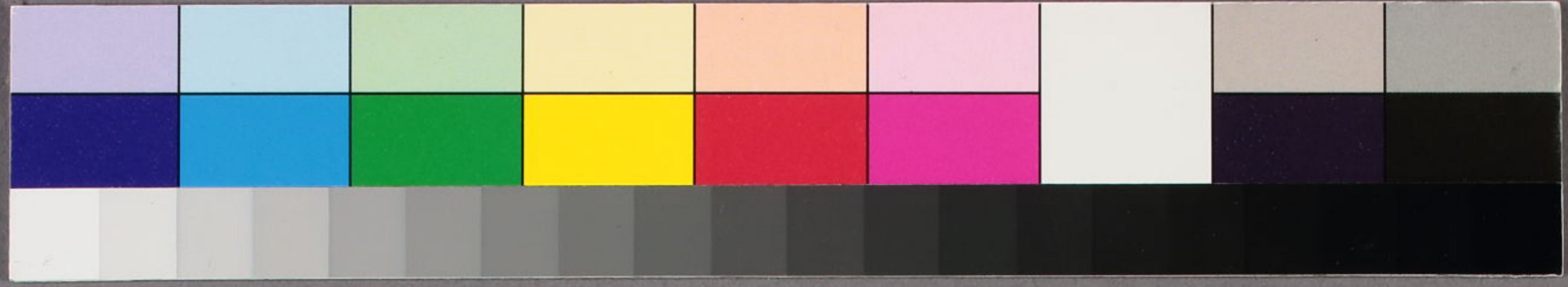


季高  
 註解  
 改正月令博物筌  
 十月部  
 二







和歌新選二葉草 有實長伯著 全二册

此本ハ哥ノ題ヲ得テ趣向ウカニル時  
大ニ便リニナル本ナリ菊ノ歌詠ニト思  
フトキハ菊ノ條下ヲ見レバ初ニ菊ニ縁  
アル詞ヲ出シ其後ニ讀合セテテ歌  
詠ニ證哥故事枕詞ニテ記ス。天  
地日月州木魚鳥其外歌ノ題ニナル  
モノハ悉ク名ニ准シテ出ス下卷六哥  
學心得ノ讀方秘傳カズク載ス

歌道人物志 全七册

古来ヨリ近世ニテノ哥人素性未だ  
年數ニテ委ク記ス御名ノ頭字ヲ  
以テイロハ分ニシテ烏丸様ハカノ部ニ  
記シ冷泉様ハレノ部ニ出シ人丸ハヒ  
ノ部ニ出ス其外准ジテシルベシ且名  
歌ヲ加ヘラケテ記シ評論ヲナス

七夕由來記 全一册

二星ノケテ記シ詩哥ヲ加ヘ辨明ス

十月之部目錄 △印ハ俳諧の季

青 卦月支 調子 陰陽生  
生註 十月異名 生註

大雪 卦冬 至

冬至至賀 卦冬 至賀

獻履襪 △履長賀 △履奉る

赤小豆粥食 卦冬 至賀

日令 朔 朔旦冬至

曆奏 卦朔 朔旦

前宗像祭 卦卯 朔旦

空也忌 卦卯 朔旦

都新津島 卦卯 朔旦

春日祭 ○大原野祭 ○鬮わり神祭  
杜本祭 ○當麻祭 ○當宗祭 ○日吉祭

吉田祭 ○山科祭 ○平野祭  
梅宮祭 ○中山祭 ○松尾祭

中 五節帳臺試 △帳臺の試





殿上淵醉

持

狩使

持

鎮魂祭

持

新嘗會

持

童女御覽

持

豐明節會

持

日陰鬘

持

持

小忌衣

持

酉の市

持

伊三高大明神祭

持

大坂道陸神祭

持

子祭

持

大師講

持

近江吉臨時祭

持

都御祭

持

掛鳥

持

親鸞大忌

持

後日能

持

都加茂臨時祭

持

都宇賀祭

持

神樂哥

持

月令

御火焼

持

神樂

持

庭燎

持

神樂哥

持

阿知女

持

採物歌

持

諸拳

持

韓神歌

持

大前張

持

井奈野

持

山神祭

持

磯等

持

髮置

持

袴着

持

顔見世足揃

持

歌舞妓顔見世

持

綱貫

持

雪車

持

標

持

雪壺

持

雪竿

持

雪作

持

時令

雪吹

持

ゆききたふれ

持







正月よりくる月と有る△復月ハ漢書

一陽来復とる月なり△天正月

も周の正月と同一義ナリ△暢月

ハ禮記の註陽久しく屈して後ニ

暢とハ暢月といふと仰り△幸

月ハ同春註又幸と克なりと有て

萬物よく克るといふ義ナリ△陽

と一陽来復とる月也へ名づく

○秘蔵 亥の月

つゆの月とつきのを秘蔵は

秘蔵の月と仰り

莫傳 如き月

月もにふかす神話の神功月

あまればりの今やあくらん

同 壬子の月

山風とまはれ月といふあま

とこハ志をれてあくらんり

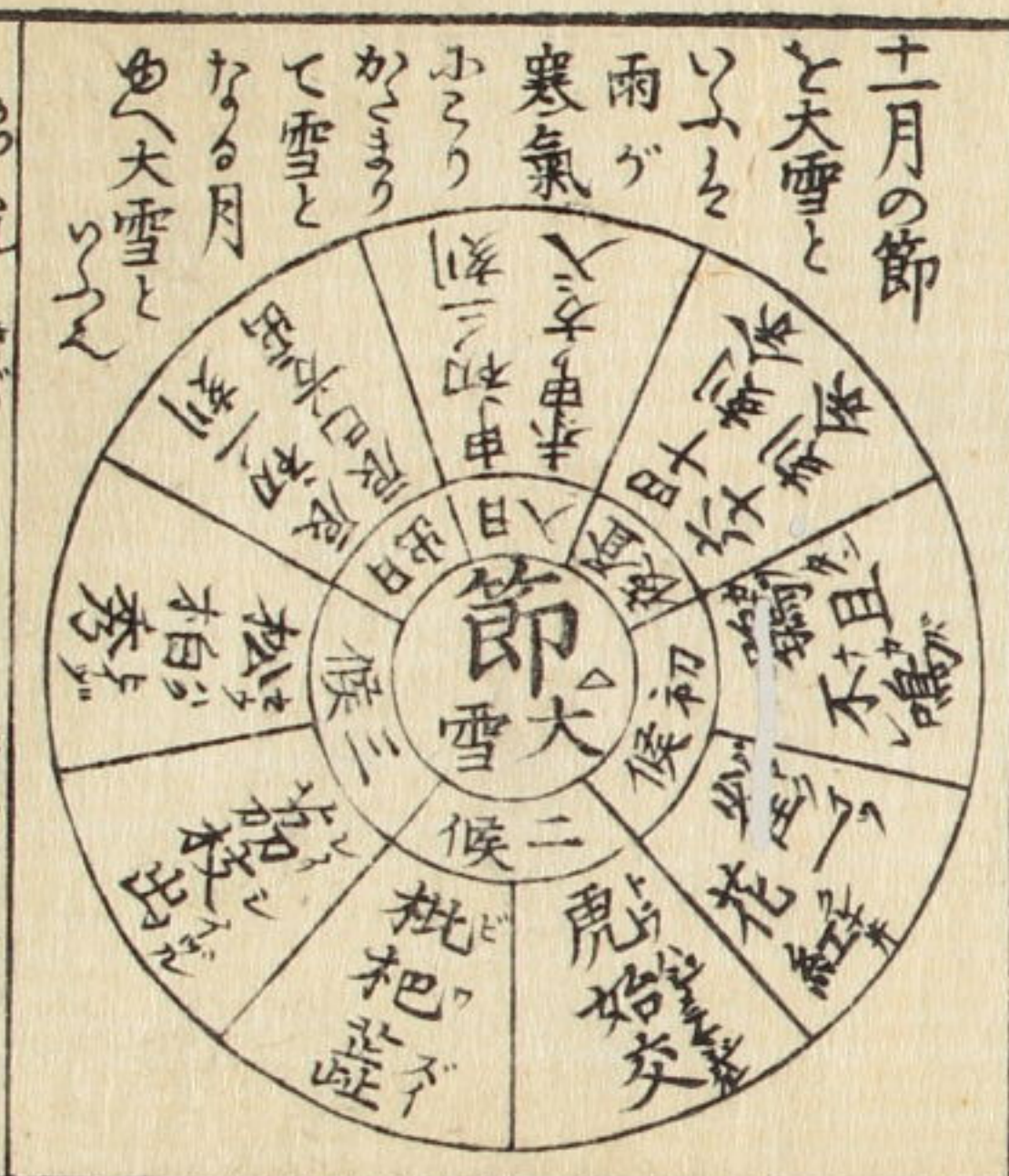
蔵玉 かづの月

あまのまきくものまきの神功月

たのまきくものまきの神功月

同 壬子の月

今始こそそのまきくものまき



十月の節  
 大雪の節。七十二候。艸木七十二候。  
 昼夜長短。日の出入等左に記す。

○鶉且ハ雉に似て色黄黑夜鳴て  
 且と求る鳥なれば求且鳥ともいふ

○雀一花の華本草亦も見えず  
 いせつしまひらうなげ○虎始交ハ



禮記の注は 虎ハ陰物なる由ハ陽の生  
もるふ感じて交るといふ也 ○枇杷  
何れハ枇杷の花さの出る也 ○荔枝出  
るとハ酒をさるるの陽氣よりふのび  
出る也 ○松柏秀るとハ冬木せぬ松柏れ  
ども陽氣よりよふされてよく秀る也

### 節の養生

今月補薬と吞むべし  
尤大熱の薬と服は

冬うつらげ又東南賊邪の風とつ  
ぶむべし是を犯せば病と生じ

### 冬至

中の名ハ七十二候。草木七十二候。  
昼夜長短。日の出入等尤記



○蚯蚓結ハ禮記の注 蚯蚓ハ正陽の氣に  
感して後ふ出るもの也今少しの陽氣生ず

るふもハ蚯蚓を以てのひぬかぢを  
云之 ○蜂蝶蟄蝶も蜂もさるる也出さる

○麋角解ハ陽發るふ達て麋の角あ  
れと落る也 ○剪綵時新と日水よれる

也婦人の衣業も一線やとやちなる也剪  
綵の新きも出来る也剪綵はきれ細事也 ○水

泉動陽下生る故氷たる水も泉もさるる也  
○花信風至諸菜の花を催を風とて吹至る也

**冬至賀** 聖武天皇神龜二年十一  
月天皇大安殿ふ出御有

て冬至の賀辞を受う云續日本紀  
朔且冬至の事ハ朔日の條あり

冬至の日ハ一陽未復する故ハ一陽嘉節  
といふ。唐より今日ハ在京の官人朝服を  
着ハ衣内拜賀と上ハ王候より下  
民間より酒宴と設く祝ふ

○哥 一とらふ君よりひのふ代こめ  
いと長き日のなきうはつらん 為真



非老臣君の渾るい安の冬まきか順川  
下を流るも流るも橋の冬まきか柳居

詩冬至五字對句

同上

夜向三更靜 一陽方動處

ヨハ夜十カニ近ウシ 一陽ノ氣ガソラクウ  
テモノニツカナリ

愁添一線長 萬物始生時

ウヘソテイツセシラナカシ  
物オモヒハ糸スシホトナガ  
ウナツタ日ニイヨクマサル  
ヨロヅノ物ガハジメテ  
キサトキジヤ

詩冬至七字對句

詩礎

岸容待鴈將舒柳 鐘初動

カニヨウニキテロウラセシニ  
河岸ニ鴈月ヲニツテ井ルヤウ  
ナケニキハツクハカハル柳ジヤ  
カ子ノオトモ初  
メテウナリ

山意衝寒欲放梅 日正融

サンイツクカシラホツスルヒラ  
山ノヤウスカ寒氣ヲラソレズツキ  
ケルヤウナハ因カウトス梅ガアルユヘシヤ  
日ガモタイア  
ニドカニオウタ

詩冬至詞

方巨山

至日親書不幾行梅梢橫月

シニツクニシヨラスイカ  
少スクウモキナリト  
クダリトモナイノニハヤ梅ノコス  
正二月カケラヨコタヘテタツガレニナラフト  
スルハ一タ日ノミジカイユヘシヤ

欲黃昏 夕夕リトモナイノニハヤ梅ノコス

漢宮紅影無人見 未必曾添

カニキタウチキ  
一線長 官宮ノ官女タチカ赤イ糸テ日カ  
ゲフハカルノヲタシモ見ルハハナイ  
カニタニアイトヒトスチホトモ日ノ長サカフ  
フクヤウニハニエス

故事 獻履襪 履長賀 履奉

冬至 唐土の婦人冬至の日履と襪と賀  
姑ふくそまつる是長至と踐の義ニ  
魏の曹植ウ冬至ハ襪を獻する  
表ハ曰冬至履を獻するハ長き  
を履そまつると賀する事あるはし  
淵鑑類函に見えく

律管灰飛 冬至の日室中に慢を以  
て律管を置其方位は

多て律管不葭の灰とこめねくあり  
氣至ればおののけく灰飛さる後漢書云

赤小豆粥食 共工氏の子不才小  
して冬至の日死て

疫鬼とちなる平生赤小豆を畏  
ふれば今日赤小豆粥を食して

赤小豆粥食 共工氏の子不才小  
して冬至の日死て

疫鬼とちなる平生赤小豆を畏  
ふれば今日赤小豆粥を食して

赤小豆粥食 共工氏の子不才小  
して冬至の日死て

疫鬼とちなる平生赤小豆を畏  
ふれば今日赤小豆粥を食して

赤小豆粥食 共工氏の子不才小  
して冬至の日死て

疫鬼とちなる平生赤小豆を畏  
ふれば今日赤小豆粥を食して



あまの波はくくつとつちちりり新楚  
歳時記に出る

**冬 神農祭** 唐土の人炎帝と  
号以百草をなめ

て薬を初めたり医道の祖神  
故今日医師祭アと名づく

此月田の神を祭る事 兵神農の  
事委しく日本歳時記に出る

**冬 天氣** 冬至よまはやく降出  
たる雨ハ晴おそく雲

うとくたりやせし風をそく星乃  
ちうくと見ゆる雨のあがまきし

**冬 占候** 冬至よ此の方よ青き雲  
われ来年ハ大よすく雲

わらきあわくありき氣あればひて  
くく黒きは水く白きく疫病

くやる黄なるハ火災あり但し  
五穀田畑よいよく天晴まで暖

われ来年麥すく冬至の後日  
よ壬の日あまはひびりあり二日よ

壬の日われハ早まくるし四日小あれ  
ハ豊年ハ六日よあまハ大水分あれ

ハ海ひるむるハ九日あられハ麥作よ  
し十日よわれハ五穀すくといふ

**冬 養生** 冬至よハ陽生して日々  
に陽氣生じるとき

内よ安く坐してみたりハ他行よ  
うくハ今日房事を慎むべし冬至前

後婚禮よぐくハ尚又。養生。詩。  
故事。妙術委しく日本歳時記出

**日令** 此部ハ十一月日決定する事  
并よ支の定まる事を出

朔今日世俗小豆飯を喰ふハ  
日何れがハハといふハ李時珍の増山の井

今日冬至よ當る時ハ上下とも祝ふ  
たと冬至よあまはひびり今日ハ小豆

飯又ハ小豆餅を喰て祝ふハ  
且ハ唐の共工氏ノ故事ハ准るハ共工

氏の事ハ四丁メ赤小豆粥の処ハあり  
○今日枸杞みく湯あますハ不老



朔 朔旦至 今日冬至小當る事と  
よたまく小朔旦至

よらる時ハ目出度祥瑞多ふ  
よりて天子南殿ニ出御らる節

會行ハ群臣賀表を奉る事  
委しくハ天子俗談云々本出らる事

朔 曆奏 今日明年の曆を天子へ  
奉るといふ主上南殿ニ

出御ありて是を御覽あり曆乃  
てしまるハ欽明天皇十四年百濟の

博士が奉るといふ江波等日本紀等ニ出

非曆奏也老の敵をかくは生窓  
丑大 住吉新嘗祭。今年の新米を

日 阪 神ニ奉る事今百廿七日の事

二京 永觀律師忌。東山禪林寺永  
日 都 觀堂の開基。天永二年今日寂

上 相嘗祭 相嘗といふハ神々相  
とくきくアイムへと讀む。今日天皇  
正禊殿ニ御幸なりて勅らるて

三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒  
降劔。大和。津島の大社を祭る

其國の国司を命じて其國の宮  
倉の初米を供む先代旧事記ニ出

○延喜式ニ曰相嘗祭の神七十二聖有  
とらる。近頃ハ絶ふると公事根元出

上 筑 宗像祭 筑前国宗像郡  
卯前 祭神三座延喜式出

○神體ハ素盞鳥のうとひし三女  
○田心姫。湍津姫。市杵島姫日本紀ニ出

○一説ハ大和山城にも宗像の社ハ  
アといふも同躰の社なり

日 吹 革 祭 燗齋とも書。鍛工鍛  
治より始る。昔後鳥羽院太刀カを

くせむ事好ませむひて時の  
名工をもを禁裏へめされ十二月おわり

ちて其月々々番おらるるを  
ゆら其時いより山の土を取らる

用ひらる故彼鍛冶も度々性来



していさる山の神を拜せしより  
ついにいさるを祭る事とあれり

能 成るるつゝ草祭の自さか 北枝  
吸草祭物も休む粟田口 西陽

狂 之のつと風呂てふこの祭  
船史

九京 〇貴船結神 十京 〇五條天神  
日都 御火焼 日都 御火焼

〇今日五加湯又浴せしべし  
〇今日脊又灸せしる事を忌む

〇京 〇粟田口神明御火焼あり  
〇花園院御忌日 〇京妙心寺あり

〇空也上人の延喜帝第二の皇子おて  
わつせり出家せり天録三年

〇空也上人の延喜帝第二の皇子おて  
わつせり出家せり天録三年

〇空也上人の延喜帝第二の皇子おて  
わつせり出家せり天録三年

〇空也上人の延喜帝第二の皇子おて  
わつせり出家せり天録三年

〇空也上人の延喜帝第二の皇子おて  
わつせり出家せり天録三年

躍の念佛と修行も坊中の衆俗體  
のまけ并ふ平定盛出家とありし  
故事委し 神佛祭祀に出てもありし

能 遊きし日空也余傍を髪 雪山  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 職人盡哥合  
〇職人盡哥合  
〇職人盡哥合

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり

能 鉢叩 〇焼鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛  
外 〇火葬場と巡りて瓢箪取  
たききく高き念佛和讃等を  
唱ふ昔ハ鉢をたききりあり



世ハ季吟又其時々々守るといり

十天〇三津八幡宮御火焼  
日阪〇天王寺佛名會音樂有リ

上大卒川祭 卒川社奈良の子守  
日和 町有開化天皇此地

小て四月九日崩ト御陵ヲ祭神開化  
天皇。子守神。住言の神と三坐ニ奉寄

の書ハ此祭年ハ兩度有と書して祭ハ  
此月ヨリ出ル。按ふ此祭四月ハ行ふと三

枝祭といつ此月の祭を卒川といふは  
〇此祭ハ春日祭のあつる日行る神祇

令ふのどる三枝祭と同一かるをくハ  
四月中々あつるべしと公事根元上出

又三枝祭ハ卒川をいつと神祇令上出  
三枝とくはくといふもいふもいふもいふ

〇顯昭の説ハ三枝とハかくと扇あり  
未廣くハ祝やといふ尚四ノ四十一又ハ

右の祭り春二月と當月とあり

申中 日吉祭 近江の国日吉山王祭あり  
四月嚴重の祭礼あり

日四十 杜本祭 當麻祭 當宗祭

申中 吉田祭 山科祭 平野祭

卯上 梅宮祭 中山祭 松尾祭

右の祭當月と四月と兩度あり  
能ハハ初めを用ゆる由四月と以冬の  
景物しとを此月おなる季吟翁  
も句躰やうて季と定むといふ

日五十 〇大阪。今宮の社御火焼  
〇諸国八幡御火焼有

日丑中 五節帳臺試 △五節の舞  
△帳臺の試

舞姫五人たりはつりの儀式あり  
天子帳臺よ出御ありて御直衣

よ御指貫まゝ御沓ををらね  
清見原天皇の制玉ひし事と

いつり天皇吉野宮ハ琴を彈き  
さし時むくの山ハ雲おろり神女



天降して天皇の曲に應じて五  
 度袖をかへして舞くはより  
 五節と名づく。清見原天皇御  
 宇は唐土より昆崙山の王と五  
 まつせ玉へは其玉闇とす  
 第一の玉の光り遠く五十兩の車  
 小至る是を豊の明とす。天皇は  
 の川にゆきして御心とよむし琴を  
 彈多し。小神女空より下り雪の  
 袖をひるふ。天からしてこ  
 ざりけきかみの玉を出して仙女の  
 らを御覽じたるに云く。源平盛衰記  
 此説信じがたれども哥小う玉  
 と讀するはより所ある小似たり  
 哥 わらわもわらわもあはれすもか玉を  
 たれんはゆきくはあはれすも  
 古今天は風雲れかひら吹らちよ  
 乙女のまごまごすれん 宗貞  
 續後撰 同きあを此のちまのふ  
 おとの袖もひらりそつ 実雄

中 殿上淵醉

此日五節とて公卿  
朗詠今中うさう

はひらひ其後乱舞たり次第ふ  
 杳然とさきく北の陣をめぐり五節所  
 よつり又取々小推泰らるとて哥を  
 うたひる事。此事正月三日の者  
 神酔はふく酒酔とい事。此は  
 非 肩脱の袖は物遣く帝衣上人 奔吟  
 中 侍使 今日五節所は給はるる  
 實 雉子を交野へ狩りに  
 遣はさる使をいす

哥 を月さくごのあうらみくす  
 かうゆくは野ふさもくじつ 俊頼  
 非 乃の祀ふをさまし侍使 嵐雲  
 狂 貧乏の物れつういハ節季  
 とくかこのころひのく 信海  
 中 鎮魂祭 人の魂のうらみ  
 實 ゆききてまされ中

元年十月宇麻志麻治命瑞寶と



つんで帝后の御祭らる是はじり此神八座宮内省よりあとしは秀吉公の時吉田山より遣り奉る

卯 **新嘗會** △新嘗祭ともいふ  
○其年の新穀の初

總を神小奉らせり天子御代初め小行りりと大嘗會といひ年毎不行るを新嘗會と云用明香玉三年四月より此事始る神代卷より天照太神嘗新嘗と見えは神代より有幸おや

卯 **禪林七百首** 賢阿比呂林のすこも  
らをておかきあふむむじらへ 御製

卯 **童女御覽** 清涼殿に童女と召して天子御覽す

卯 **豊明節會** 前日神小供したる新穀を今日天子は

卯 **日蔭髪** △日かげの糸△心葉。日

卯 **故節會** 行りし

卯 **李坡** 其のゆそむりて

卯 **薙** まこ下り苔といふ俗に狐のくせといふ艸を薙む

卯 **心葉** 料とらるあり

卯 **續古今** たふあふそのゆは日かけ

卯 **其角** 非 其角

卯 **其角** 非 其角

卯 **其角** 非 其角



**小忌衣** 山藍袖 小忌神 是八疊  
の明か着する装束あてけ

がれを忌と云心へ今日神樂の役小當と  
小忌の殿上人といふ小忌衣の色白き布を  
春艸又小鳥あざと山藍あてまうつける

哥 うりやむきまのぬれをこころも  
日かけのみくまのく人 俊成女

非 雪のくまのぬれをこころも  
宗因

中伊 山藍袖 小忌神 是八疊  
**三嶋大明神祭** 祭神大山祇

命祭禮の日諸国より商人来りて  
諸の物を商ふ是を三嶋酉の市  
といふて季と云。能因法師西の  
哥當社へ奉るまひ一幸あり

哥 天の川苗代あませきくこせ  
あまこりまの神あまの神 能因

非 多むの林あまの酒の市 麥水

甲 子祭 子祭 子祭  
**子祭** 子の月故子の日大黒と

祭 多むく世俗又大黒ハ鼠とつうりめと

志 うりやむきまのぬれをこころも

狂 うりやむきまのぬれをこころも

每 甲子小ハ祭るこ此月ハ子ハ月故

甲 子小ハ祭るこ此月ハ子ハ月故

○ 此月子ハ日燈心を貯めれハ大福

あり 子祭子燈心の事委く

論 あり面白き事へ見よべし

非 子祭りや大黒小白大根 鬼貫

狂 うりやむきまのぬれをこころも

十 大 道陸神祭 俗又泥く

天王 寺村合法辻の辺小さき石

佛 あり此石佛の顔ハ米のこをぬり

供 物を供へ笹又蜜柑と噺して

踊 る是を道陸神祭といふ此祭

の 二三日前より村中ハ童出て往

来 の人又供物料とをふあふふれハ

纏 又泥をぬりて人を巻くむ

非 道陸神の中ふれ出る草汁 玉芝



狂きるまをれ多りと見へて乃て禊祓  
ふより禊もえまをれより 才流

六十 諸国神明宮御火焼  
日六 大阪座六官御火焼

甲 近江 日吉臨時祭 此祭は八建曆  
三年十月十八日

勅使を立くま臨時祭禮行ハ  
れるより初る今ハ中の申此日

十 京 御靈の 一 雲居寺淨  
日八 都 御火焼 蔵の忌日あり

三 北 〇今日遠方へ行く事なれ病人  
見舞事なるれ子の年の者尤慎し

四 北 大師講 〇智恵粥 天台宗の祖  
唐の智者大師今日

寂に依て天台の諸寺此日より今  
日まで大師講と修行と比叡山日光

山等ハ北日より廿三朝まで昼夜法門  
有是と論義といふ民間ハ今日小豆粥

榎柴を折て箸と爲是と智恵粥といふ  
非 智恵粥や何の宗なる争は 乙由

六 北 南 〇春日若宮宵祭又御祭宵催  
日六 都 ともいふ今日奥福寺の僧頭屋

田樂は長谷川黨神前小奏詣  
て野太刀を携へ馬を牽是と遍照

院の渡といふ今夜亥の刻過若宮神  
明の燈火とけし闇中小神體を御

旅所又遷し其後火と上げ音楽等有之  
非 〇は祭きててそをせを刀淫 如来

掛鳥 〇鳥かけ 〇春日御祭に  
鳥獸を贄とらるをいふ

雉羽兔狸等なり廿日より廿五日  
由く春日の神宮此獸を改む是

を獸改めといふ

非 〇柵を忌部系不備所の骨筋版 静夜

七 北 南 御祭 〇春日御祭ともいふ  
日七 都 春日若宮の祭あり

若宮の御祭ハ春日の安宮と  
そより常ハ官もなく芝原あり

今日の御祭よりいなり此御殿を  
營み若宮を渡御なし奉る毎



年八月十日に此御殿の材木は大和國中より所を之く例式よりく木を伐出し春日へ奉る九月朔日御繩棟の式例あり當月廿日ハ神殿の造營より廿六日の夜御旅所へ神幸なり巖重の儀式より關白殿下より騎馬の伶人等つうはらふこれ日使とり御祭ハ崇徳院の御宇より始るなりや

哥

後村上院御製

きりくたやまをさまけしま日やふをくまお月も秋をさるやうり

非

秋をさるやうり

後日触

今日春日ハ触り祭禮の後故なるづく

親鸞大忌

報恩講。百宗の宗祖親鸞大

ハ弘長二年十月廿八日小寂ハ壽九十歳より故は廿二日より今日迄

報恩講を修行以俗御霜月と云

非 消ぬがらあつまるお月秀頗

京都宇賀祭

京九條に有此所の東西の辻と宇賀

の辻といふ倉稻堀神訣ハ博物考

非 秋をさるやうり

山友

下京加茂臨時祭

北祭ともいふ此祭ハ寛平元

年十月より初る。かづれ花吹とて次第にこれを献じて使符

にりそむ式あり清涼殿より出御ありく行はは次第より

哥 夫木

季經

祇山のみくし川はわけえい

大い人のかきんふらやま

非 秋をさるやうり

飄山

月令

此部ハ日れささまらるる十月一ヶ月の事をしるす

御火焼

此月所々の神社にて火を焼湯を奉る是ハ神樂



庭燎の余風あるべし夫く社まで  
行つて日違つりゆきまじ前くの目の  
取ふ記以。此月御火焼とるは地中  
ある陽氣を追出に訣職時記拾遺

**神樂** △東三條御神樂 △山神樂  
△里神樂。昔天照太神

山戸ふこりしせむい故世界  
やとらりし時諸神岩戸の前  
あつまう庭火をた弁新しあひる

事有神代卷も出今神樂を行つた  
其余風あり故に行つたところ此物  
皆神代卷たのひもあつた△東三條

の御神樂下の卯の日といふ昔ハ  
東三條重明親王の御宅あり其

辺アふ両社の神有仁平三年十  
月下卯の日神樂派奉らせとる

事拾林抄其外諸卷も出今ハ絶つり  
△山神樂といふ禁中内侍取つて

行つたといふ△里神樂といふ禁  
裏の外神社より行つたといふ

哥拾遺

能宣

あつたはけれもつとるれつとつま  
ひうけもそいへ出ぬとあは

新古今

貫之

たつたあつたもかつたぬあはの  
かたやハ人のさめきつらん

雪玉 詠月前神樂

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

連はまはやあつたあつたあつた山 宗硬

あつたあつたあつたあつたあつた 宗養

あつたあつたあつたあつたあつた 紹巴

非あつたあつたあつたあつたあつた 荷号

あつたあつたあつたあつたあつた 野水

あつたあつたあつたあつたあつた 去来

狂人の面あつたあつたあつたあつた 為国

あつたあつたあつたあつたあつた

哥天木 里神樂 入道前関白

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた



能縁地な松子も阿るや里神楽 白羽

狂かると火を燃らし多る胎や店

齒りろく甘い里神楽うな 金山

庭燎 神樂の時焼火。火處焼とハ  
取々庭燎と奉るを神代巻出

哥 堀川百首 公實

天と川る神の心をるるや  
庭火の烟をよとらん

家集 詠庭火神樂 小舟

ふきつる庭火のあれ管の音を  
んまてや神をきくらん

非 糸細まおひし庭燎ハ 三惟

神樂歌 神提歌 千歳早哥  
吉々利星

得錢子 木綿作 晝目 弓立  
朝倉 其駒 寗殿哥 酒殿哥

右ハ神樂の時くくくハ物の名ハ  
神提哥ともいハ千歳の哥ハせんさい  
せんさいせんさいやふとせのせんさい  
さいまんさいまんさいやよろいよのまんさいや

右の外。早哥。得錢哥。酒殿哥等  
小皆々一首づ哥有委しく補遺ハ出

○右の外尤お記ハ採物哥。阿知女韓  
神。大前儀。小前張等ハ神樂催馬樂

のくハ物の名ハいづきも季々ハ然  
人倫植物ハハハハハハ貞徳翁ハいつり

尤謠物名目ハく句およみてハ本  
くハ神樂の謠物と體ハ團ハ季々ハ

阿知女 是も神樂の謠物の名ハ  
し説多し委しく補遺ハ出

採物歌 神幣杖藤弓釣  
校餅片折諸奉勤

是ハ神樂を舞人。さうハ幣。弓。勤  
ハことまふらて其まふら物ハ事

を哥ハつててうハ故おとりの  
哥といハ。哥ハ補遺ハ委しく出

韓神謠 本 兄まよゆり  
おけりれハ神のあをき

せんやわくまき。オ末ハひてまよえも  
らてんれハけうをきせんやわくまき



〇ままゆハ伊豆国三島といふ所より出る木繖ハ木綿ハ紙にほたる木なりそれを四手ふしてかゝるとりうけ神を祭るべからんといハ宮内省よりまは韓神二座をナリ也 梁塵思業抄

**大前張**

〇小前張。是も催馬樂の識物なり大前張の哥

七首小前張の哥九首首名目はる老小記に一々哥はれも哥ハ補遺より出ル

**大前張哥の名**

〇宮人 〇木綿 〇志天 〇難波 〇瀨 〇前張 〇階 〇香取 〇井奈野 〇脇母

**古**

〇小前張哥の名 〇蓆枕 〇開野 〇大宮 〇磯等 〇篠波 〇殖槻 〇鯉角

湊田ハ葦。神樂謡物催馬樂の訣くりく補遺より出ル

**山神祭**

所々山林にある事あり木の上は四手と切をけ

火を焚祭るをといふこれも庭燎の余風なり

**曆賣**

〇俳 〇曆賣といふ男乃の

**髪置**

世俗より男女とも三歳より

ををい髪置纏とて。白髪綿。松。橘の作花。末廣扇。童のりといひぎらにゆひつは産

神へ恭詣るとりその日乃食膳よハカ十頭といふ魚菜小石

を膳のふちより付る是一生をんとて歯のわつらんやと祝ふ心とて高貴の御方も三歳

みあるやあの時ハ此御祝儀作り花と頭といふも高貴の例ハ

〇酒氏葵髪をき用うまはらひるは

**袴着**

〇披初 〇帯解 〇紐直 〇民家の男子五歳よりある時

ハ此月吉日をきい袴着とて其盤のうへより上下を着る



△被初、京より女子七歳まで着初る大阪の女子四歳の時當月吉日と多しひ着初るへんは初の事ハ他国ふいふしむりけりけきぬとて女の白きさぬをうきを歩行しむり近頃ハ其きぬふりやを條たるをわげきとて△帶解とりぬ紐直の事ゆく女子五歳までハ帶をせぬ紐よてむとてびしげ五歳の當月より帶を改むありハ七歳より改むるあり○高貴の御方ハ五歳まで御袴着九歳の御時御紐直臘月吉日とあるんご行るといひ

○源氏裳着引くやむきつむをかしまて發するもまはれといふ  
○袴名女子ハ袷も二節袴 素流袴も女中の中布をまく 永房  
○狂いも女子ハ扇はちりも袴長のまらひもこの親なり 百駄

顔見世足揃 △かぶき足揃。衆  
△もとより大阪にてハ

顔見世の初る前夜役者その芝居は集りて盃をあはをいふ

歌舞妓顔見世 △顔見世△顔見世手打。大阪よ

てハ當月役者の出交りあり此月座元をさぶる役者を一年の充てりてかゆる初めハ顔見世と唱へく十日の間夜子の刻より芝居を興行して一座の役者のくは出て見物へ名乗をまし其後銘を得手の藝をなげ役者見物へ名乗をなげ時手打といふ事ゆり是ハ若者十人も廿人も連中とくまへく一組とありなめ言葉を声よく識りて柏子木とるハ此柏子甚面白し

京都の事ハ年中祭礼記、委く記に  
○顔見世や嘆いさむ下邸の袴 其角  
顔見世や天橋宗の火見身 女靜



既見世や船舟の火の輝りなり 涼南  
影見世や浮船と成る里を教 周平

**綱貫** (非) 根子や大坂おもしろ  
匠師の依 雅有

**雪車** 板より四方をかこむ櫃の  
如く作て屋根を後下りか

拵の車より如き形も拵へ荷物を  
積む雪の上を引ゆくも雪車といふ

○唐の輜とて物ハ板を以て作て  
足は泥の上を歩行具へ手回し出り

○哥堀川百首 初をゆきよりよきま  
つらも山紙の旅人よりよのこま

(非) 山紙ふ死を回するまやびの乃 竹夏  
のやま車板は車もやまくと素啓

**標** △かしき。北地の人より雪の  
上は歩行為は藤をまわしてゆ丸

きこころの如く作てまわつてゆか

そくとや毛をぬきこもかきこも云  
(非) 積る雪の淵をぬきかきこも素芹

○哥夫木 かしきく紙の山紙旅も  
雪にまわすぬきをかきこも 仲正

**雪香** 革の香足袋の如く  
ふういぎ頭まで及ぶりの又

狂 袖香のいてわつしと香雪の  
ひもむきふるまをこもる 伊貞

(非) 雪香や踏てゆ松の香ほせ 宗隆

**雪竿** 雪深き国より人往来の  
便の身より竿を立て標とん

○哥夫木 大炊御門家佐  
紙の山紙をさく竿のくひりやうき

日紙より白手よりまわしんへねも

(非) 雪手やうらうら谷の今もても 五樓  
雪の千や人ももる菊の後 布門

**雪垣** 雪よりき国いぢれとぬぬ  
やうにる雪垣なり

(非) 雪垣やはれと丁のぼり舟 李郭



時令

又ハ十月記 十月又ハ三冬の季にも用ゆるものなり

雪作

北国ハ雪降を乞ふ時かならば雷鳴り是を雪おこしと云

雪吹

雪風と書。雪風文に吹をいふ

非

非ハ傘ハ雪ハ金ハふきハ市涼

ゆぎたふれ

北地の山道おとハ旅人まじ雪風ハ吹

はれ雪

はれ雪と書。音通

能

能ハ水の手ハ此雪の語。一井

哥

夫木 主殿

そんれ雪ちりちりちりて消ぬれん  
世よふるこや物うらやうん

かみ雪

かみ雪。雪のこ

雪土

雪土。雪と土

雪土

雪土。雪と土

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪

雪

雪。雪



しら雪

雪が石又ハ木と(さか)らりつりりたるを見立

ふる雪をりりといふ(さか)るべし

非 風経る木くみまのつらなる 五原

雪轉

雪まろハハハ雪まろけ 雪中の戯まふ事

非 たりやな振落のつらなるまろけ 千振 女房の力あふやまろこり

雪佛

雪達磨 雪布袋 雪兔 雪獅子 雪めて

佛まこハ獸の形を作るをいふ

非 雪佛とくふ凡き目まらけ 乙由 同(さか)らりりといふ口も口も雪兔 文榮

深雪

ふくみつらなる雪をいふ

雪女

雪ふくつらなる時ハ陰氣凝りて怪し形をいふ

非 けきれ君と名はむ雪女 宝庸

雪やけ

霜やけといふ如く極寒の節の病

あはれちやうくあつきをいふ雪何うといふよ同じ雪あうり次より

雪明

唐の孫康といふ人學字を好む家貧ふしく

油をし雪中ハ夜雪の明りて書をよむといふ御史大夫といふ官もある

非 是ともまれば書く雪何う瓦研かゝる書み夜とくは雪何う舟子

氷柱

氷水 氷筋 氷筍 簷の下に

滴る水の氷まるく山中の樹梢よりたると凡一抱ふも及べし

哥 雪玉 けりけりけりけりけりけり 尾花ささるれおおれ妹うま枕

千載 雪をいふまねの床やあれぬんつらなまろこりの氷水 経房

非 本とのまふとてつらぬくつら正種 正のまろつらかかけくま雪山 鬼貫

村の中まろつらの音をまろ 布門 松のまろまろつられまろり其角



霽

雪と雨とまぜりて降るハ  
経家

みぞれふるそ山の下をそとあそら  
かきくまされき世にやう那

みぞれふるそ山の下をそとあそら  
こむらぬるあそむのふきる 家隆

連水あるまをみぞれのふきる 宗祇  
みぞれせ 梅の香氷のふきる 宗碩

みぞれふるそあそむのふきる 周桂  
能みぞれを物騒しくとあり時支考

雪岩嶺る部家々々音る霽なる其角  
らう月にかきてゆくそとこれ山光山

在雪けそとねむしくと出しうと  
とそれのなきのほり合もなし 貞徳

詩 霽ノ詞

寒光帶雨山難白カニ  
ニジツテフルニ

イカホドフツテモ 冷氣侵人火失紅  
山が白クシラス

サムサガ人ノカラスニコタ 古撒明珠跳瓦  
ヘテオコツタ火モキエム

上ハシハシクトニテ玉がヤ子ノ 輕敵碎玉  
ウニトアカトオモハバ

入窓中イルサウチ サラクトクダケタ玉が  
ニドノウチラヘチツテクル

電カミ凡電ハ皆冬の陽をあやま  
と夏の陰に伏するなり

哥 萬葉集  
あられつらうとね系伝の江れ  
年月をそとえれとらうぬくと

續古今 土御門院  
あられつらうとね系伝の江れ  
年月をそとえれとらうぬくと

新續古今 定為  
あられつらうとね系伝の江れ  
年月をそとえれとらうぬくと

詞 風ハ 風ふらりあそむ風  
さゆる。風またあそむ風さゆる。風

雲ハ 雲ふらりあそむ雲  
さゆる。雲またあそむ雲さゆる。雲

雪ハ 雪ふらりあそむ雪  
さゆる。雪またあそむ雪さゆる。雪

霽ハ 霽ふらりあそむ霽  
さゆる。霽またあそむ霽さゆる。霽

霽ハ 霽ふらりあそむ霽  
さゆる。霽またあそむ霽さゆる。霽











夫木可也これい雲のき山よれくをれ  
 仍へさるぬ舟のわりのなる 寂蓮  
 ○平家物語小朝拜の文子日  
 いつをわりのこむらめくもてるを  
 苦もよよこちんげとここれに  
 ようてねりんばが水もれをき  
 みらやむむさつあもれり

**非**寒苦もあをねのなをへ 李坡

**杜父魚** づれ降る時出る魚のり  
 魚ともいふ 船可 奔出

谷川あふふ多し此魚人をふまは  
 口を泥の中へ入もくさるる  
 あまのかち船の碇のぶくも  
 るゆかかく名づけたるあり

**非**かあやもあつられし 朝雄

**鯿** 六月頃小なる時をツハスと云  
 西国にてワカナ九月一尺許

のをメシロといふ十月ごろ二尺許ある  
 をハニチといふ江東ふてイナといふ  
 冬のお長じてブリと云大なるもの

三四尺ありよく出世魚と稱して  
 塩をる鯿を歳暮に祝儀に用也  
**非**千鯿を鯿あふふまはく 支松  
 鯿あふ中なるまはれたり 其角

**必用** 此部六十月一ヶ月要用の事  
 養生天氣食物等記に

**破軍**

夜九ツ	寅ノ方	夜八ツ	卯ノ方	夜七ツ	辰ノ方
朝六ツ	巳ノ方	朝五ツ	午ノ方	昼四ツ	未ノ方
昼九ツ	申ノ方	昼八ツ	酉ノ方	昼七ツ	戌ノ方
暮六ツ	亥ノ方	夜五ツ	子ノ方	夜四ツ	丑ノ方

**日刻** 亥ノ日子ノ日亥ノ刻子ノ刻  
 事とるはよ用也べらび

**方角** 家普請他行東南の間高  
 ひては此月天道東南へ行越

**樂事** 霜のゆくの神まふては  
 身ふしむほくのさむらも

おへむ折くのゆくの音を  
 炉邊に聞え鳥あつて酒宴陽



氣をささぐる夜むかしや  
此頃のこのころまじし

**養生**

山茶花 早梅 大山樫 茶花  
伽羅木 このまじし

**衣襲**

黄菊 移菊 龍膽 五節

**初雪衣**

面白 裏紅 蒼紅梅 面紅梅 裏紅

**天氣**

巳午北方の雲ハ風。風の後  
ハ雨。北西の風ハ久しく吹

事なし。明日十九日雨風をつら  
と。冬至の後の北風ハ半日一日

あくやむ南風も同然さうさじ  
南風も雨もやうさうと多し

**占候**

雷あれば来春米高し  
虹あれば俄に大豆高し

日蝕あれば来年大凶不作。夏  
の冷行れば疥癩の病多し

**養生**

此月つめたた物を枕ふは  
べつて人の目を昏くす

まごまごの蟹亀やうの甲  
何るものをさくく人の神氣を

損ぐる。其外養生の法も妻  
しく延壽養生論ふ出は故に略之

**飲食**

此部ハ十一月一ヶ月の食  
物の類をわめ出は

**新子燕**

非位更初やしあさ  
立圃

**干大根鈎**

香の物大根干を  
當月冬至後早く

干はよくと極寒よあれど  
いとあし

**澤庵漬製**

此漬やうの沢庵  
和尚としめく

製せられぬ名づく漬法  
大根百本 塩三升 糍三升 糠一斗

右常のおとくま漬るまうし  
糠内五升 熬く用也

**干菜鈎**

干菜鈎 干菜鈎 かけ菜



青干菜

大根の葉を懸けてゆき  
軒をふかけて干す

何れ酒

餅米を蒸て酒とも  
小醸したるものあり

南都の菊屋に製する物名産  
常より何れも名よりの季とん

みぞれ酒

あられ酒の少しふど  
こころのあり

用意品

当月菊の雨霰復を  
さるべし菊の花衛

くおとろふ所の上を切べし土  
地を見立く種をうつく作るべし

委しくの菊品とる本ふ出右の科  
青柚葉つきのまう久しく貯

へる法まうの柚餅。金柑を  
九牟母をし其外菓物久しく

貯中。当月製とるよし何しの  
訣委しく日本歳時記  
茶湯料理指典此二本よ出

は指南抄ハ茶湯會席の献立より  
平生の料理月々ふりけく記に

王月終

十月飲食並料理献立

禁物 亀 鱈 鰻 鱈 鰻 鱈 鰻  
物 魚 乾物の魚 生乃

非 生の蕪 生菜 又火う  
焙 肉と食ふべし

好物 雞肉 九月より此月を食  
べし 稍補あり ○雀肉 冬

食ふが 委しく  
十月の部もあるす

料理 汁 ちりしん ぬぶう  
色うど

かさ・ころ葉 玉子 ねぶう  
大根 岩 け

たこ せうごう 猪・皮 ぶやう  
葉つぎ大こん ぶめ

膾 さいの・赤がい さいの  
さいの・大こん さいの

きんしん さいの さいの  
さいの さいの



清汁 汁て貝 かもし

目 綱 差味 綱 肴

綱 小さい切 大こんろうぜ さんぞす 鯉・さんぞび 足る・あう風・ さんぞび 鴨 さんぞび

煮物 煮物 玉子豆腐 鴨 さんぞび

雁・あまび 加つう 生鯛 さんぞび

和會物 和會物 数のこぼ 日こ

吸物 吸物 鯛の子 焼肉

玉子白こ ほうごん ほうごん ほうごん ほうごん

新とうろん やまごとうろん けいし葉 やまごとうろん

精汁 精汁 松房 松房

鏡のこ 鏡のこ 鯉引皮 于え草

志あど 志あど 于え草 于え草

清汁 清汁 松林 松林

贈 贈 大こんろうぜ 大こんろうぜ

あげ年房 木くろけき 木くろけき 木くろけき

大こんろう 日そやん 日そやん 日そやん

差味 差味 守いも 守いも

守いも 守いも 守いも 守いも

守いも 守いも 守いも 守いも

守いも 守いも 守いも 守いも

守いも 守いも 守いも 守いも

守いも 守いも 守いも 守いも



ふんぞうりやー  
りぞまふんやー  
あうふりせん  
あげふ・たうり  
やぶ・本ふり  
くら・まんばそ

**煮物** にもの  
大かぶら  
んぎあん  
大んごん  
さつふ

さうのいも  
むつとす  
ねさけ  
かぶら  
やまごう  
かきごう

かぶら  
やまごう  
かきごう  
かぶら  
やまごう  
かきごう

**和會物** わかいもの  
さす  
まわ  
かこん  
おむき  
彩のり

あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる

**時鳥** ときどり  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる

**魚** いし  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる

**青物** あおもの  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる  
あひる

**正術算學圖會** 全八冊

塵劫記世ニ多シトイヘ此卷ハ至テ  
算法ノ奥儀秘密ヲスシカモ初心ノ  
サトシ安キヤウ亀井算開平開立  
天元術ニテモ平假名ニシテ記ス終リニ  
深秘口傳ノ一ノ片カナ交リニ書ノセ  
画図ヲ頭ニ此書ヲ以テ算數ノ書トシ

**天満宮天神御繪抄** 頭形大師作 全一冊

此書ハ大師夢中ニ天神ヨリ升ヅカリ  
玉ノ秘密ノウラナヒ本ニテ商事方  
角得物失物其外人間一生ノ吉凶  
禍福ヲウラナフヲ掌ヲサスコトシ

**當世料理笈** 小本一冊

世間ニアル本ハムツカクニテ常体ノ  
料理ニハ間ニアヒカクニ此卷ハ正月ヨ  
リ三月ニテ月々分テ常体振ニノ料  
理献立ノミアツ申傳ヲヨシタル料理ト  
テモ此本御立候ハ心安ク見宜出来申候



